



「教えることは学ぶこと」と生徒のために手本を書く才籽さん

近代詩文に新境地

国際舞台でも高い評価得る

「一生懸命、臨書で学んだ漢字、かなの基礎を投入して、好きな歌や詩を書く近

書道

伊東才籽さん(六四)

釧路市春採七の二三

「一生懸命、臨書で学んだ漢字、かなの基礎を投入して、好きな歌や詩を書く近

後進の指導に力
自らも磨く

熱心な指導が効を奏し、今年七人が一挙に師範に

合格するなど、毎年、師範合格者、毎日書道展入選者などを輩出し、後進の指導にも力が入っている。もちろん、自分自身も「井の中

の蛙にならぬよう」、年に八回程は札幌で、日展会友辻井京雲氏等に学ぶなど、さらに研鑽を深めている。

才籽さんの本名は渡辺礼子。樺太に生まれ、学生時代から書に親しんだが、結婚後一時中断。昭和三十九年から活動を再開し、故佐

四十七年には、まず全日本書芸文化院の師範資格を取得。五十年から道展、その後毎日書道展、創立書道展に連続入選。国際舞台でもその作品は高く評価され、六十二年にパリで開かれた第二回日本の書家百人展では「パリ賞」を、今年十月にはソウルで日本の書家五十人と韓国の書家五十人による展覧会で「セゾン文化大賞」を受けている。

俳人としても釧路文学賞に輝く

伊東礼子の名で俳人としても知られる才籽さんは、第二句集「続百蕾」で昨年度の「釧路文学賞」を受けただばかり。同句集に序文を寄せている「北海文学」主宰の鳥居省三氏は、序の中で「書の『呼吸』というか『気脈』というか、その姿勢と同質のようなものを俳句作品の中に見て、或る種の驚愕を覚えた」と述べているが、俳句にいかんなく発揮されている繊細で豊かな感性は、書作品にも十二分に表現されている。俳句を詠み、書を書き、日本舞踊をたしなみ、ゴルフもするなど多彩な才能と、油絵を描き、芸術を愛する夫ともどもの広い交友、闊達な人柄が、「臨書もただ写すならおもしろくない。自分流にアレンジする」という、伸びやかで明るい書風につながっているようだ。

二年に一度は、夫・一さんの油絵と二人展、才籽書道院の作品展、韓国の書を紹介する日韓書芸交流展を開催するなど、展示活動も盛んに行っている。今後は「生徒たちにも近代詩文のおもしろさを知らせたい」と語っている。

とても非常に幸福な事でした」と義雄さんはかみしめ

全部丸暗記する。楽譜を持

ので、この差は歴然と大きい。ただ素人とは言え、そのどん尻に少しでも迫らな